

[085] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10180>

出版情報：語文研究. 85, 1998-05-05. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《會員著書紹介》

迫野虔徳著

『文献方言史研究』

「文献方言史」とは、いかにも聞き慣れない名称である。日本語の歴史的研究において、一般に知られる「文献国語史」と「方言国語史」という二つの方法、これらを見据えた形で、本書の筆者は、「文献」に残された「方言」を手がかりに、新たな日本語史研究の視点を開こうとしている。すなわち、中央語以外の方言が見られる「地方語文献」を、方言史の断片的な資料として利用するのではなく、中央語などとの関連からその資料的価値を見極め、その上で日本語の歴史的研究の有用な資料として積極的に利用するという立場である。以下に、本書の構成を掲げる。

第一章 方言史と日本語史

第一節 防人歌と上代特殊仮名遣い

第二節 外国資料と方言

——新ストラブ・日本語辞典のオとヲ

第三節 「コラス」(毀)の成立——語中ヲ(モ)音の

残存

第二章 新音韻の成立と方言的差異

第一節 促音と撥音の表記の動揺

第二節 撥音の史的推移

第三節 促音と撥音の相関——撥音の後のパ行音

第四節 北野社目代日記の撥音表記

第三章 オ段長音の開合

第一節 オ段(合音)・ウ段長音表記の動揺

第二節 開合の混乱と地方的差異

第四章 方言特徴の成立——「中濁」考——

第五章 方言差の形成

——日本語の東西方言差と「テイル」——

第六章 文献資料と方言

第一節 方言と文献批判——交隣須知の言語

第二節 文献と言語指標——『天正狂言本』の言語——

第七章 方言語彙史

第一節 方言語彙史

第二節 九州方言の語彙——日葡辞書の「下」注記——

第三節 東国系抄物語語彙覚書

第四節 『梅津政景日記』——江戸時代初期の東国武士のことは——

第八章 方言史資料——「日本語俗言解」考——

右の構成に示されるように、その内容は、地方語文献そのものの考証から、言語変化の過程を地方語文献によって説明したもの、あるいは、文献によって方言の形成を考察したものなど、史的变化という縦のつながりと、方言という横の広

がりが、網の目の如くはりめぐらされている。そして、その網の目は非常に精緻であると言うべきで、このことは、本書で述べられる結論が、すでに学界の定説となり得たものも少なくないという事実が物語っている。

最後に、本書は既発表論文を基に成り立っているとはいっても、収録にあたっては、いずれも相当の改訂が加えられていることを書き添えておく。

(平成一〇年二月 清文堂 A5判 四〇四頁 九〇〇〇円)

辛島正雄校訂・訳注

中世王朝物語全集9 『小夜衣』

本書は、鎌倉中期から南北朝頃に成立したと思われる『小夜衣』の初の現代語訳付注釈書である。

『小夜衣』の伝本は大きく二系統に分けられており、本書の底本は第一系統に属する国立国会図書館蔵本。本文校訂は、同系統の宮内庁書陵部蔵本、名古屋大学文学部蔵本、天理図書館蔵一冊本、そして第二系統の学習院大学蔵二本の計五本を参照して行われている。

現代語訳は校訂本文の下段に配され、双方を容易に对照できる。

注は上中下各巻の巻末に一括して掲げてあり、内容は、本

全集の編集方針に基づき、典拠の指摘、本文校訂に関する説明にとどめてある。

物語の展開が把握しやすいように、本文を段落に分け、各段落の内容を要約した小見出しが掲げられており、巻末に載せられた年立・登場人物系図とともに、物語の理解を容易にする。

『小夜衣』の注釈書としては、昭和三年に出版された『校注小夜衣(異本堤中納言物語)』(清水泰、龍谷大学国文学会)があるが、それ以後は七十年間、新たな注釈書が一般読者にも入手可能な形態で出版されることはなかった。そのため、今まではあまり親しまれることのなかった物語であるが、今回、懇切な注釈書の出現によって、物語研究者のみならず広く読者を獲得することが期待される。

(平成九年一二月 笠間書院 A5判 二四三頁 四〇〇〇円)

大原一輝著

『王朝物語叢攷』

—平安後期を中心として—

本書は平安後期物語に関する著者の長年にわたる研究成果をまとめたものである。主に「語文研究」「文藝研究」などに、昭和二十九年から平成九年にかけて発表された論文が収録さ

れており、構成は以下の通り。

序

落窪物語の笑ひ

狭衣の道心

狭衣物語の女性

狭衣物語の神

狭衣物語の内部引歌

濱松中納言物語の「世」

堤中納言物語の世界

とりかへばや物語の世界

「有明の別」の基底世界

長徳期に見る小右記と栄花物語

付

建禮門院右京大夫の悲哀

東海紀行・婦家日記の引歌と本歌

「あはれ」と「をかし」、「情」と「理」など、それぞれに
対立する要素に焦点を当てて作品を読み解く試みがなされ、
その結果、複雑に構築された物語世界の様相が明らかにされ
ている。特に、「堤中納言物語の世界」「とりかへばや物語の
世界」「有明の別」の基底世界」という一連の論文は、まず
『堤中納言物語』に於ける「あはれ」に対する「をかし」の

優位性を指摘し、次いで「をかし」の要素を内包しながらも、
『堤中納言物語』のような「短編物語的「をかし」の世界に
留まり得」ず、「源氏物語を頂点とする長篇物語の持つ伝統的
な「あはれ」の世界」を描き出す「とりかへばや物語」「有明
の別」について言及されており、読者にとって非常に理解し
易く、かつ興味深い構成となっている。

(平成一〇年三月 出版サービスセンター)

A5版 一二四頁 非売品

船津正明著

『国語教育論集』

本書は修猷館高等学校長の現職にある著者が、昭和四十六
年から平成九年にかけて、国語教育関係を中心とした各誌に
発表した論二十篇をまとめて、一書としたものである。各論
の題名を以下に掲げる。

- 1、国語教育雑感
- 2、古文の読解指導における問題点
- 3、小説教材「ころ」について
- 4、徒然草の「ことわり(理)」について
- 5、高等学校における古文学習指導の研究
- 6、「徒然草」の学習指導について
- 7、古典教育論

- 8、国語科古典（古文）を中心として
 - 9、説話文学の学習指導
 - 10、物学文学の学習指導
 - 11、和歌文学の学習指導
 - 12、軍記物語としての「平家物語」の学習指導
 - 13、「理解から表現へ」の学習指導
 - 14、日記文学の学習指導
 - 15、建礼門院を中心とする『平家物語』の学習指導
 - 16、国際社会の中の古典教育
 - 17、「猫」にみる人間形象をめぐって
 - 18、これからの高校教師の資質と養成
 - 19、『平家物語』の運命観
 - 20、国語教育展開の三つの観点から
- 一覽して分かる通り、扱われている事柄は国語教育全般に関わるものから、個々の教材に関してのものまで幅広い。しかも教材に関する論でも、学習指導の一手段としての教材研究に留らず、作品に対する深い理解を示すものとなっているのは、「あとがき」で著者自らが述べている国語教育の重大性——真の国際化につながる自国の文化や歴史伝統に関する深い教養を育てることを常に念頭に置いてきた著者の姿勢の表れであろう。

（平成一〇年一月 A5判 一四二頁 非売品）

瀬里廣明著

『露伴の修省論を読む——易経と旧約聖書』

「あとがき」に於いて著者自ら断っている通り、これは学術論文ではない。少なくともそれを目指したものではない。『文明批評家としての露伴』（未来社 昭和四九年）以来著者が一貫して追究してきた露伴を（汎世界的・反近代的な知）とする視点を背景に、「修省論」を今日のな問題意識で平易に説き明かしたものである。その底流には、近代社会が物質文明に覆われることにより逆に析出して来ざるを得ない本然の精神的価値への恐懼修省と其処に向けての努力の必要性という「修省論」の主題が、ますます現代的なテーマとなりつつあるという著者の意識があらう。

序論にあたる「幸田露伴とはどんな人か」「露伴とハイデッガーの思惟の経験」「超越的思索から現実的思索へ」の三章は、西洋と東洋の対立を乗り越え、寧ろそれらをも横断する〈反近代の知〉としての露伴の特質を論じたものである。

本論である「修省論を読む」は、大正期に書かれた露伴の言葉に即しつつそのエッセンスを平易な言葉で平成の読者に伝えようとするその自由な語り口が魅力的である。屢々その筆は時事問題や現代文明批判にまで及び、時にビジネス指南書の如き相貌すら見せるが、無論それも予め学術論文ではないと断った上でであり、何より日常茶飯的なものと高

尚なものとの間を連続的なものと捉えてその間に断絶を認めなかった露伴の「喫茶喫飯底を離れて特異靈妙の一物あるに非ず」との立場に適う態度と言えまいか。

齊藤茂吉は、露伴の「努力論」を日光菩薩に、「修省論」を月光菩薩に喩えて併せて一体のものであると言ったという。ならば著者の次作のタイトルまでもが既に髣髴とするようであるが如何であろうか。とまれ、本書は過去の露伴の思想に触れつつ自らの現在を如何に生くべきかに思いを致すに恰好の一冊と言えよう。

(平成九年二月 白鷗社 A5版 二七八頁)

内山弘編著

『天正狂言本—本文・総索引・研究—』

室町時代書写とされる現存最古の狂言台本が『天正狂言本』である。また、この天正狂言本は一般に東国語的性格を有していることがこれまでに指摘されており、狂言研究者にとって最重要資料の一つであった。

そして本書はその天正狂言本の総索引である。これまで狂言台本の総索引としては『虎明本』の索引唯一つしかなく、狂言研究者は大いなる不便を感じていた。

本書の構成について聊か詳述すると、まず本文編として野上記念法政大学能楽研究所に所蔵の天正狂言本の複写を底本

とした翻刻本文が掲げられている。なお、ここで着目すべきは底本で特殊拍(促音・撥音)専用の仮名として用いられている「ㇿ」を他の「つ」と區別して「ツ」と翻字していることである。続いて索引編では天正狂言本の語彙を自立語・付属語に分けて掲載し、さらに付属語については前後の文脈を引用することで利用者の便を慮っている。研究編には「天正狂言本の表記について」「旧説との主な相違点」と題された二つの論考を掲載する。氏は「付けたりのようなもの」と述べられているが、どちらも緻密な考察に裏打ちされた優れた論考である。

「演習の準備の度に、次から次へと未詳句が登場してくる天正狂言本の解釈に手間取り、四苦八苦した」院生時代の氏の研究の結晶とも言える本書の刊行により今後の狂言研究がさらなる発展を遂げることは間違いないであろう。

(平成一〇年二月 笠間書院 A5判 三三三頁 九二二三円)